



# 僕のお留守番



森野イブキ

今日も朝、玄関でニッコリと微笑んだお姉さんが、ボクの頭をなでて出かけていく。その間、ボクはお留守番だ。

お姉さんはよく、淋しい思いをさせてごめんね、と言ってくれる。それにボクは大丈夫だよ、という表情をしてみせる。そんな毎日なんだ。お姉さんは知らないけれど、お留守番をしている時のボクは全然淋しくないんだ。だって、本当は一人じゃないから。

ボクが部屋に戻って、「ニャア」と、一声鳴くと、いつもの仲間たちが集まってくる。

空中からは一番年上のお兄さんのエアー。窓辺のサボテンからは男の子のサボー、そしてラズベリーからは女の子のベリーだ。三人は自分たちの事を妖精だと言ってるよ。

ボクがこの部屋にやって来てから半年位たつのかな。次の日にはもう、彼ら三人が出て来てボクと遊んでくれたんだ。エアーは何でも二人よりもえらい妖精で少しえばっている。サボーはおしゃべり好きで、ベリーは明るく元気な子だ。よくボク達がやる遊びは、エアーが作った風にサボーとベリーが乗って、キャイキャイ言う事だ。ボクは重くて風には乗れないけれど、何度もピョンピョン飛びはねて、二人に触ろうとするんだ。エアーはそんなボク達を見ながら、大笑いしているよ。

そんな風な楽しい毎日を、ボク達は過ごしていたんだ。

今日はお姉さんが休みの日だ。ボクは朝からお姉さんにたくさん遊んでもらった。

そしてお昼頃。「そろそろお買い物に行ってくるから、少しお留守番お願いね」玄関でそう言うと、お姉さんは出かけていった。

ボクはいつものように部屋に戻ると、「ニャア」と、呼んだ。すると、いつもの三人が現れた。でも、エアーはいつもより難しい顔をしていたんだ。サボーとベリーは黙ったままだ。ふと、エアーは窓を指差した。「ほら、空気を入れ換えるために窓が少し開いているだろう？ ここにはオレも長く居すぎたと思うんだ。それでな、しばらく旅に出ようと思ってな」

ボクは旅の意味がわからなかったの、キョトンとして小首を傾げていると、サボーがボクの所に来た。

「旅ってというのはね、ここを出て知らない所へ出かけてゆく事だよ。エアーは元々ここに住んでいた訳じゃないんだ。僕やベリーとは違うのさ」

そう言って、少し淋しそうな顔をした。そういえば、いつも元気なベリーも今日は静かだ。何だろう。旅ってそんなに淋しいものなのかな？ エアーは明るく笑っていた。

「何、お前さんが寂しがる必要はないさ。サボーもベリーもここにいる。それにお前のご主人様だってな。だからオレがいなくなっても大丈夫だよ」

エアーがいなくなる？ そんなのはボクは嫌だった。だって、いつものように四人で遊べなくなっちゃうじゃないか。ボクはエアーを引き止めようと、首を横に振った。すると、エアーはボクに近づいて来て軽く頭をなでた。

「オレは気まぐれだから、またここに戻ってくるかも知れないけれど・・・とにかくお

別れだ。それじゃあな」

そう言い残してエアーは姿が見えなくなって、風となって窓の外へと出て行った。ボクは呆然となった。そしてとても悲しくなった。急にいなくなってしまったエアー。ボクの目が次第にかすんでいく。・・・・・・・・これは、何だろう？

「泣いているの？」 ベリーがそう言って近づいて来た。  
そうか、これが泣くって事なのか。これまで毎日が楽し過ぎてわからなかった事だ。

ふと、玄関に人の気配がする。サポーとベリーは、そっと姿を消した。  
ボクはぬれた目を前足でゴシゴシとこすって、お姉さんを出迎えるために玄関に向かった。

「ただいまー」というお姉さんの声に、ボクはいつものように、「ニャア」と答える。  
「どうしたの、悲しそうな顔をして？ そんなに淋しかったの？」

お姉さんはボクを抱き上げて、そっと抱きしめてくれた。その温もりが、ボクの悲しさをそっと和らげてくれた気がした。そしてボクは今、とっても幸せなんだなあ、と思ったんだ。

おわり

## 僕のお留守番

<http://p.booklog.jp/book/52759>

著者：森野イブキ

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/morinoibuki2012/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/52759>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/52759>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ